

書評 村上晴美  
細野公男・緑川信之・岸田和明 共訳  
情報検索の認知的転回  
—情報検索と情報検索の統合—  
丸善, 2008.2  
316p 21cm 定価 4,800 円 (本体価格)  
ISBN978-4-621-07945-4

本書は、2005 年に出版された、Ingwersen と Järvelin による “The Turn: Integration of Information Seeking and Retrieval in Context” の日本語版である。完全な翻訳ではなく、枚数の制限で一部の内容が削除されている。

本書は、1992 年に Ingwersen が執筆し “Information Retrieval Interaction” (翻訳書名は『情報検索研究：認知的アプローチ』) を発展させたものである。

本書の構成は以下のとおりである。

第 1 章「はじめに」では、情報検索・検索研究に対するアプローチを探究するための出発点として、情報検索評価における実験室モデルとそれに対する批判と反論を紹介し、情報の検索・探索研究分野のモデルを設計するための基本原則を述べている。

第 2 章「情報の認知的枠組み」では、認識論の面から認知的観点の発展を概観し、情報検索・検索のための認知的情報概念を、情報の相互作用の過程と関連させて論じている。

第 3 章「情報検索研究の発展」では、情報検索研究における最近の主要なモデルとその成果、及び、当該分野の限界と未解決の問題について論じている。

第 4 章「システム志向情報検索」では、システム志向の情報検索研究の発展について、認知的観点に焦点をあてて論じている。また、現在の情報検索研究における、認知的観点からみた限界と未解決の問題について述べている。

第 5 章「認知的および利用者志向の情報検索」では、利用者志向と認知的情報検索研究の発展について論じている。中心的なモデルを概

観した後、いくつかの分野における課題と成果を述べ、この分野における限界と未解決の問題について述べている。

第 6 章「統合された情報検索・検索研究の枠組み」では、認知的な見方に基づいて情報検索・情報検索のための統合的な枠組みを提案している。

第 7 章「情報検索・検索のための認知的枠組みが意味するもの」では、情報検索・検索の設計と評価において、提案した認知的枠組みが暗示するものを考察する。9 つの次元を論じることにより、2 方向の活動路線を提案する。一つは、実験室アプローチにもっと文脈を加味するように情報検索研究を拡張する方向であり、もう一つは、情報検索研究においてタスクの文脈と技術の両方を拡張する方向である。

第 8 章「新たな研究プログラムへ向けて」では、情報検索・検索研究における今後の研究のためのプログラムを提案する。9 つの次元を組み合わせた 4 種類の研究の枠組みを述べている。

第 9 章「おわりに」は本書の結論である。

本書は、「Library Science (図書館学)」を背景に持つ「Information Seeking (本書では情報検索と訳されている)」と、「Computer Science (直訳すると計算機科学、ただし日本では情報科学や情報工学と称されることが多い)」のアプローチで発展してきた「Information Retrieval (情報検索)」の統合を目指して書かれたものである。「この二つの領域間の意思疎通はあまりなく、情報検索の分野は、情報検索が技術と非常に強く結びついているとみなし、後者は前者を使い物にならない実践とみなしている」と述べられている。我が国ではどうであろうか？事態はもっと悪いかも知れない。後者に携わる人の多くは、前者の存在すら知らないのである。このような現状を鑑みても、本書の出版には大きな意義がある。

原題の “The Turn” は、「現在は、情報検索と情報検索とを新たに統合する見方を発展させるために、過去を振り返り未来に目を向ける時期である」との考え方を伝えることを意図してつけられている。本書の題名は「情報検索

の認知的転回」となっており、「転回」に「情報検索」と「認知的」が補われている。原書の内容を日本の読者にわかりやすく伝えるとともに、前作の後継書であることも示唆する、見事な訳出である。

本書は、情報検索や情報検索の研究を網羅的に説明するものではない。認知的観点を中心とする著者独自の視点から、近年の研究の一部を取り上げて論じ、情報検索と情報検索研究の統合に向けた新たな提案を行うものである。そのため、初学者が本書の世界を理解するためには、概説書をあわせて読むことが必要であろう。訳者でもある岸田氏による『情報検索の理論と技術』（勁草書房、1998）がおすすめである。徳永氏による『情報検索と言語処理』（東京大学出版会、1999）も、情報工学における情報検索の解説書として優れているが、情報検索についてはあまり触れられていない。情報検索や認知的・利用者志向の情報検索に関しては、三輪氏による『情報検索のスキル』（中央公論新社、2003）やみずほ情報総研吉川氏編著による『サーチアーキテクチャ：「さがす」の情報科学』（ソフトバンククリエイティブ、2007）が読みやすい。また、個別の研究内容に関する詳細な理解には、田村氏編著による『情報探索と情報利用』（勁草書房、2001）が良い。

訳者序として、「近年になっても情報検索はWeb 上での情報検索に代表されるように、情報技術に依存したシステム志向のアプローチの影響が顕著である。しかし、本書で示すような文脈依存の認知的アプローチに基づく研究にもこれまで以上に十分力を注ぐ必要がある。本書がこうした視点の発展に貢献できれば、幸いである。」と述べられている。

評者はもちろん上記の考えに賛成である。本書を情報工学者や技術者の視点で見たと想定してみよう。第1章は、従来の実験室的評価に対する問題を10個の異議と回答の形態で論じているところが、気づきにつながり、面白いだろう。本書の中心ともいえる第6,7章は、「相互作用的な情報検索、情報検索、および情報行動の過程、文脈を考慮したすべての認知的行為者の一般化モデル」の枠組みが非常にユニークで面白い、と評者は思う。ただ、情報工学者

や技術者から見るとやや抽象的、観念的に見えてわかりにくいかもしれない。彼・彼女らにアピールするためには、モデルやデータのわかりやすい例やそのメリットが必要かもしれない。「どう企画・設計すればうまくいくの?」という具体的な示唆である。その点では、具体例の豊富な第4,5章が役に立つだろう。第8章で提案される研究プログラムは興味深い、具体例はあまり目新しくないと思われるかもしれない。

本書は、情報検索・情報検索研究に関する最近の学術的な翻訳書として、日本の情報検索研究者必読の書である。さらに、図書館員をはじめ、図書館・情報学に関わるできるだけ多くの人に読んでもらいたいと思う。なぜなら、「情報検索」や「認知的・利用者志向の情報検索」は、図書館員や図書館・情報学研究者が学術的に大きな貢献をしてきた（今もしているし、今後もするであろう）分野だからである。図書館員や図書館・情報学者にとっては、その業績を再確認し、自身の研究や業務に関する新たな視座を得ることができるだろう。

評者は、大阪市立大学大学院創造都市研究科都市情報学専攻において「情報検索システム論」という講義を担当している。例年、受講生の約9割が情報工学を専門とするため、「システム志向の情報検索」を中心に、「認知的・利用者志向の情報検索」に少し触れている。残念ながら情報検索についてはあまり触れる時間がないが、そのような研究分野が存在することは紹介している。授業では、講義内容にあわせて情報検索に関するさまざまな図書を紹介している。本書は、「情報検索とユーザインタラクション」の回と、最後のまとめの回で紹介することになるだろうと、この原稿執筆時点では考えている。

最後に、「Information Seeking」の訳語として、一般に使われてきた「情報探索」ではなく「情報検索」が当てられている。その理由は原書における「seek」と「search」の使い分けを尊重するためと述べられている。その訳出は今後どのようなインパクトを与えるのだろうか? 評価が楽しみである。

(むらかみ はるみ 大阪市立大学)